

〔研究ノート〕

人間の「外面」と人間の「反対」 ～「他者理解」の背景にあるもの

高橋 暢 雄

Human Spatial Awareness With Noosology

TAKAHASHI Nobuo

【キーワード】存在論、人間の空間認識、他者論、ヌーソロジー、他者理解

1. はじめに

本論は2022年4月に開設した「武蔵野学院大学ヌーソロジー研究所¹⁾」における研究成果のひとつとして、これまでの個人的研究考察をノートとしてとりまとめたものとなる。同研究所ではコストをかけない視点からYouTubeでの動画発表やzoomでの意見交換といった発表議論等の手法を用い、アウトプットが従来と異なる為、メンバーのひとりとして論文等従来型での発表がやりにくいと感じている。その為、今後も時宜に応じて本学紀要にて「研究ノート」という形で発表をさせていただきたいと考えている。

尚、研究ノートという形式故、論点をランダムに列挙する形となることをご承知置きいただきたい。

2. ヌーソロジーと本論の関わり

筆者が「ヌーソロジー研究所」にて研究の対象領域としているのは、所謂存在論、つまり「存在すること」である。ただ筆者の不勉強や学内担当との兼ね合いから、これまでその種の論文を殆ど発表していない。しかしながらこの領域を2000年代のはじめくらいから研究対象としてきた。

その中、2006年に現在本学にて客員教授とヌーソロジー研究所所長を務める半田広宣氏との知己を得て、空白期はあるものの数十回の研究会活動を続けてきた。元来ヌーソロジーと呼ばれる思想体系は「オコット」と名乗る高度な存在からの教唆にて開始されているので、その部分では学術的研究対象とはなり得ない²⁾。加えて、予てヌーソロジー周辺では、スピリチュアル等の流行から「どこかで聞いた様な用語」を用いて楽しみ、それを研究と称する傾向もある。だが、それらがヌーソロジーという思想体系の中核を覆い隠してしまっている様に感じている。

然るに、筆者はあくまでも思想体系として構築されたヌーソロジーの核心に位置する「存在論」的価値が、研究対象として意義深いと考えて携わらせていただいている。

尚、本論では一般的ではないヌーソロジーにおいて用いられる用語も使用することになるが、随時補完しながら論を進めたい。

3. 本論の対象領域

本論は研究ノートとして執筆しているので、射程を広く捉える必要があるが、存在論の系譜を広く捉えるには紙幅が足りない。そこで存在に迫る為のアプローチとして、ヌーソロジー用語である「人間の外面」と「人間の内面」という視点から論を進めることとしたい。

「人間の外面・内面」というヌーソロジー内での概念が、現代の様々な思想や人間の生き方にも有用な概念であることを提示すると共に、それが「存在する」という深遠なる概念とも接合していることを、断片的にでも表現出来ればと考えている。

4. 「人間の外面」と「人間の内面」

聞き慣れないであろう「人間の外面」「人間の内面」という概念は、説明すればシンプルなことで、人間が只今現在に目の前に見えている空間を「人間の外面」、今眼前には見えてはいないが、私がいて対象物があって、部屋の中において、地球の日本の〇〇という街のどこにいるという見えない外部からの目線把握を「人間の内面」とヌーソロジーの概念では表現する。

簡単に言えば、「人間の外面」が主観空間であり、「人間の内面」は客観空間ということになる。本論ではこの両者が全くの別物であるにもかかわらず、現代人が解像度を持って意識していないことを問題視している。具体的には、実際に見えている「人間の外面」が真実もしくは優先されるべき空間であるにもかかわらず、言語の問題やデータを重視する科学の側面から、「人間の内面」ばかりが強調され取り上げられていることで、存在論の本質から乖離することに警鐘を鳴らすことが主眼のひとつとなる。

5. 「人間の外面」とは

人間の認識に外面と内面という区別があること、特に本論がより強調したい「人間の外面」という区分けは、特段新しい特殊な概念と言う訳ではない。

詳述は別に譲るが、まず、量子力学概念のきっかけを担ったとされるエルンスト・マッハは有名なイラスト³で、「人間の外面」的な視点を提示した。またノーベル文学賞受賞者でもある哲学者アンリ・ベルクソンの「純粹持続（単に持続とも）」も、同時代に「現象学」を提唱したエドムント・フッサールの「現象学的還元」も、類似の概念と言えるだろう。本邦でも古来から伯家神道を中心に語られる「中今」という概念があるし、仏教の禅でも「前後裁断」という概念があり、他にも類似の概念は数多くあるだろう。

この様に、「人間の外面」に類する概念は従来より数多存在する訳だが、難解もしくは謎の秘儀的わかりにくさからか理解されていないのかもしれない。本論では、「人間の外面」の存在があまりにも当たり前過ぎて、価値として見いだせなかった面もあるが、以下に述べる通り、近代以降言語の問題や科学の発達によるデータ主義等が、人々をして一般的かつ無意識に内面重視の空間認識に埋没させてしまうことになったと考えている。

6. 主客分離が空間認識の定説化に

「人間の外面」が軽視もしくは潜在的となり、「人間の内面」が人々の空間認識の常識の様になっているということは、言い換えれば「主客分離」が当然視されているということになる。

存在論という見地からは、どの位置に認識の視座を置くのかというのは非常に重要な事項となるが、我々は「主体があって客体がある」という視点を持つ傾向が強い。17世紀に活躍したルネ・

デカルトは「我思う、故に我あり」という有名な命題を導き出した。これはデカルトが考える主体としての自己とその存在を指し示したもので、宗教に依らない理性による自己を提起したものと考えられている。⁵これによりデカルトの思想はモノと心を分離させた「実体二元論」とも言われる。一連のデカルトの思想は大いに広まり、「我思う、故に我あり」のラテン語表記が「コギト・エル・スム」であることから「近代のコギト」と総称して呼ばれることも多い。

つまり、デカルトは「私」を出発点にして存在論を展開し、自ずと自分と世界を分離して相対峙する存在として位置づける形をとった。この「近代のコギト」が社会の様々な面で定着し、存在論の定説の様相を呈することとなった。

7. 言語構造における主客分離

続けて取り上げたいのが、人間生活に最も密接に関わる各種言語の問題である。英語・中国語等、現代で主力として使用されている多くの言語は、主語を文頭に置く等、主語が重要視されている。日本語を用いれば、「私がパソコンを見る」という形となるが、これは明らかに「人間の内面」に相当する視点で語られている。「私がパソコンを見る」という文章を絵に描いてみれば、その視座は眼前の目線ではなく誰も見ていない横からの想像目線ということになる。つまりは、デカルトが指摘するまでもなく、言語を子供の頃から数え切れない程使用していれば、自然に我々は自分が見ていない場所からの表現を自動的に想定して用いているのである。

ここで面白いのは日本語の機能である。日本語も勿論、主語を文頭に置いて表現可能であるが、主語を省略したり語順を換えて印象を変えることが出来る。具体的には、人物が主語となりそうな場合でも、モノを主語の形にするケースが他言語よりも多く見られる。「パソコンがある」「猫がいる」「富士山見えた」の様に、主語省略というよりも、主観的空間つまり「人間の外面」を表現するスタイルが頻繁に用いられるのである。尚、他言語でも歌における歌詞等には多く見られるとも思う。

この主語を排して「ありのまま」に表現するスタイルが日本語の大きな特徴と考える研究者もおられ、特にカナダ在住の言語学者金谷武洋は「三上文法」とも言われる三上章の影響から独特の「主語否定論」を展開することでも知られる。様々な一般書で三上が説く主語を排した日本語特有の文章展開は、「人間の外面」からの視座に他ならない。

一例を挙げれば、川端康成の『雪国』の有名な冒頭⁶を英語話者に伝え、それを絵に描いてもらうと、本来主人公からの目線（「人間の外面」）から描かれた文章であるはずが、全員がトンネルから汽車が出て来る絵、どこからか眺めた「人間の内面」からの絵を描いたという。この例示を見れば、日本人の言語感覚では「人間の外面」の認識は把握しやすいが、英語話者の言語感覚では「人間の内面」の認識が常識となっているとも考えられるだろう。⁷

このテーマはより多面的に分析されるべき領域ではあるが、多くの現代言語では主語重視の文法が定着していることは確かなことで、それにより「人間の内面」から空間認識する形が定着する、「主客分離」感覚を作り上げる大きな要因となっていると見ることは可能だろう。

8. データ主義に必須の「主客分離」

時代時代で科学の進化が人類の進歩に最大の功績を成して来た。本論も科学の端くれとして論を進めているが、本論が主眼としている存在論の視点からは科学主義の陥穽を指摘する必要がある。これが多くの人々を「人間の内面」のみに閉じ込めてしまっているとも言えるからである。

順を追って述べると、まず科学が重要視する「数値」「データ」というものは、「人間の外面」では成り立たない。何故なら、「人間の外面」でモノを動かすと、近づけば大きくなり、遠ざければ小さくなる。しかも目の前に他者がいた場合には、それが同じタイミングで大小が真逆に動く現象が発生する。これではモノの大きさを数値化することに意味を持たない。数値化を活かす為には、地球から月まで約38.4万kmであるとか、主客やモノ同士を分離した「客観空間」つまり「人間の内面」認識が必要となる。因みに、幾何学の世界では数値よりも図形のアナロジーが重要であり、むしろ「人間の外面」と親和性が高い。

ここで強調したいのは、主観的判断を退ける為のデータ活用が悪いという訳ではないということである。データというものが一種の危うさを孕んでいるものであることも念頭に入れて、考察すべきだと申し上げたいのである。

人間社会では力関係というものが、時に悪さをもたらしてきた。そこで社会進歩に基づき人々は「正しさ」や「理性」というものを求めることとなり、力関係優位の人間の主観（不条理）を乗り越える為には、教育で知識を身に付け、科学をより重んじ、客観的説得力を持つべく努力を重ねてきた。その流れの中に、より説得力のあるものとして「データ主義」が存在すると言えるだろう。そして、それらを近年ではエビデンスと言って、最終結論であるかの様に語られたりもする。

しかし、データというものは、実際多面的なものの一面を表す為のものにもかかわらず、自らに有利な一部だけを強調する人間の意見が通りやすい場合が見られる。例えば、円筒形のモノに対して、ある角度から見れば円に見えるし、違う角度からは長方形に見える場合がある。このケースで迷う人間はいないかもしれないが、これに類似して、一面だけを切り取り客観的という名の下に自説を強調して「明確な答え」であるかの様に見えるテクニックが実社会では多々見られる様に感じる。

筆者はプロ野球が好きだが、この分野でも近年はデータ主義が声高に強調される。それはそれで良い面もあるのだが、スポーツにおいては当然乍ら多面的なデータが取れる。打者Aと打者Bが、ある局面でどちらが代打起用に適切かという場合に、左右投手への打率、相手投手との相性打率、現在の打率、代打での打率、得点圏ならその際の打率、直近数十打席での打率、長打率、出塁率等々、様々なデータが並ぶことだろう。しかも、その差異の大きさをどの程度までなら有効と見るのかも、明確な基準があるとは言えない、2割6分と2割4分の差異を大きいものと見るか、大したものではないと見るかも難しいと言えるだろう。

この様に、データは状況判断という主観への有用なるツールとして活用されることが自然であり、データの数値そのものだけに説得力があると主張するのであれば、主観を以てして周到な状況整理による効果的なデータ活用が必要となることは言うまでも無い。

にもかかわらず、大昔から専門書、もしくは大家や実力者の意見、やがてメディアの報道、ネットの記事、インフルエンサーの発言、果てはAIの答え、という様に、不安な自分を打ち消して、誰かよりも上に出し抜く為には、それらを鵜呑みにして、自分の立場に都合の良い様に判断や行動に利用する傾向は、減ること無く増え続けているのが現状と言えるだろう。状況により、説得力のあるデータは異なるので、権威の時には正解であったものも、自分自身が活用する時にはそうとは限らない。にもかかわらずである。

つまり、権威の判断やデータは殆どの場合に、鵜呑みにして依存する対象ではなく、自分なりに何かを求める際に活用するものとして使用されるべきものである。飲み込まれるのではなく、

使いこなすものなのである。

これにて、科学主義は当然としても、そのツールを誤用したデータ主義には非常に疑問があることをご理解いただけたらと思う。数学の泰斗である岡潔は文化勲章を受章する際に、昭和天皇から「数学とは如何なる学問か」と質問され、「生命の燃焼である」と答えたと言われている。その岡は『春宵十話』で根幹の「道義」とは「人の悲しみがわかる」ことだとも述べている。つまり、データという材料を多面的に求めた上で最終的に目の前の状況として整理し、そこからある種の感性で判断をするというステップを踏むイメージだろうか。

言い換えれば、材料を集めて状況を整理した後に、最後は「人間の外面」で決定していると言えるのである。つまり、主客分離を旨とする「人間の内面」では、実際誰も高度な判断はしていないと言えるのではないかと、筆者は考えている。

9. 「主客分離」と「主客一致」

以上、現代人が「人間の内面」を無意識であれ重視している状況をいくつか例示した。データという活用して判断する対象が、恣意的に論拠とするものに変容してしまう様に、「人間の内面」化が誤謬を蔓延させる風潮が存在している。その上で更に、「人間の内面」が見えない風景であり、「人間の外面」は見える風景であることに論を移したい。

「人間の外面」と「人間の内面」の差異基準は、実際に見えている空間なのか、そうではないのか、というものであった。それでは見える空間である「人間の外面」の特徴は何だろうか。それは「自己はあるが自我は無い」ということになると思う。見えている「人間の外面」には状況だけがあり、自分自身の立場や都合は混入せず、それは状況を見て、自分自身が欲として思い浮かべているに過ぎない。風景としても、自分自身は見えない。自分という存在は首からは見えたり、鏡を使えば全体像は見えるだろうが、自分自身の全体像を直接視認することは出来ない。

これはレトリックで言っているのではなく、実際にそうなっているということを述べている。「ありのまま」に見れば、自分の見える風景にいつも自分自身はおらず、状況だけが展開されている。筆者はこのことが多くの先哲が述べる「主客一致」なのだと感じている。つまり、「人間の外面」では見える風景そのものが全て自分自身であり、そこに別の要素が存在しない為に、「主客一致」としか表現出来ないのだと思うのである。

ベルクソンがドルーズ⁸が、フッサールや西田幾多郎が語っている世界観は、単に「人間の外面」を取り扱っているに過ぎない。そしてそれが「人間の内面」の象徴である「主客分離」に対して、「主客一致」として表現されていると感じている。この違いは重要なことではあるが、また別の機会に更に論じたいと考えている。

10. 「人間の内面」に埋没している他者感覚

「人間の外面」から派生する様々な事項や問題点については、ここで列挙しきれないので、本論ではここから「自己と他者」というトピックに特化して、「人間の外面」と「人間の内面」について論じていきたいと思う。

本学院の校訓理念は「他者理解」である。これについては過去論文でも論じたが、ここから先については、「他者理解」の背景として「人間の外面」を論じてみたい。

まずは現代人が意識の念頭に強く置いている「人間の内面」における他者であるが、自分自身を見えない形で置いているので、自己と他者の間にある状況は見えそうで見えにくくなる。即ち、

主客分離では、ニューソロジーで言う「対化」が見えなくなるのである。

横から見たかの様に、自己と状況、自己と他者を置いて、自己の欲求を満たそうとすれば、それら全てが数値的な実感無き無機質なものとなるので、自己が際限無く無闇矢鱈に肥大化する。即ち、「自己」が「自我」で埋められてしまう。

更に、他者やモノが、単なる無機質で数値的な操作可能な対象の様子に誤解してしまい、他者もモノも自己すらもそれぞれが価値の多寡に応じて分けられた優劣の対象となってしまう。すると、自己も他の存在も全てバラバラに分離されている意識が強まる。同列に並べている様で、むしろ全てバラバラに価値を数値化している状態なので、モノであれば「より良いモノ」を手に入れたくなり、他者は自己とは別物の「コントロールをすべき対象」となって立ちはだかり、損得だけの対象となっていく。

状況と呼ばれるものもそうだろう。先に述べた科学やデータで切り刻むことが出来るか出来ないか以前に、無機質でそこにただあるモノと同列に並べてしまうので、状況を多面的に整理すること無く力業で制覇するべき対象であると見てしまいかねない。

いずれにしても、「人間の内面」では自己が世界と分離しているので、他者において、「他者というもの（無人称の他者）」ではなく、「特定の〇〇さんという他者」として見てしまうことが最たる特徴と言える。それにより他者をコントロールする、他者を征服する、他者を無闇に恐れる等々の過剰な意識を持ってしまい、現代人を苦しめている。しかも、それが無意識領域でのことである為、人間関係が多く現代人にとり大きな悩みの種となるのは必然のことだろう。

後に論ずる通り、「人間の内面」そのものは不要なものではないが、「人間の内面」だけに埋没してしまうことが、世知辛い競争社会の根幹に鎮座していることだけは、ここで強調しておきたいと思う。

11. 「人間の外面」の特殊性

ここで「人間の外面」における他者に関する言及の前に、「人間の外面」という現代人の常識では奇異に映る概念の特色に触れておきたい。「人間の外面」はまずは目の前に見えるものを切り取るものであるので、「人間の内面」感覚とは大きく異なる。言葉足らずで変な言い方になってしまうかもしれないが、ご寛恕いただきたい。

まずは、存在の面では「主客一致」が最大の特徴となる。見えている空間が全てであり、自分自身が見えていても、対象というよりもその空間そのものが自分自身となる形になるので、主客が分離されない。これは西田幾多郎が「純粹経験」と呼んでいる状態を指すと見ている。西田は主客が分離される前の「主客未分」な段階での「直接的体験」という体裁を採っている。つまり「人間の内面」を原則としつつも、その前にありのままに目の前を見ると、「人間の外面」的な「純粹経験」が存在するという形だろう。

「主客一致」でありのままに目の前を見るということになると、「人間の外面」では人間は移動しない。どうあれ「人間の外面」そのものが自分自身であり、たとえ移動していても、いつもと違う場所にいっても、「いつでもここ」としか表現が出来ない。後ろを向いても、そこはその瞬間前なので「いつでも前」となる。あたかもパソコンやテレビの画面を見ている形と同様の世界観が「人間の外面」なのである。つまり自分自身は不動の存在で、見えている姿側が動いており、その場でグルッと見回しても動いているのは、部屋や風景であるということになる。また、冒頭での述べた通り、目の前のモノのサイズは近づけば大きくなり、離れれば小さくなるので、数値

的な視点は存在せず、幾何学の様なものだけが意味を持つ世界観となる。

更に大きな特徴は、他者が全く逆の存在であるということである。自分自身が見えている目の前のありのままの空間には、他者はいるが自分自身は存在しない。つまり、「人間の外面」では他者には自己の姿が見え、自己には他者の姿が見えることになるので、存在として真逆の位置にいることになる。そして、モノを動かせば、同時に自己からは小さくなり、他者からは大きくなる、等様な真逆の現象が発生する。

加えて、意義深い特徴は、他者という存在があるからこそ自己が確認出来るということである。他者がこちらを見ているからここにいるということを認識することが出来るのである。その上で他者が誰なのかは順次理解されるものであり、まずは「他者というもの」が存在するから自己が認識出来るというのが最初のステップである。それ故、筆者は「人間の外面」における他者を「無人称の他者」と呼んでいる。そして、無人称の他者と自分自身は位置を変えれば背中合わせの関係と表現されるべき存在なのである。⁹

この辺を違う角度から説明しているのが、心理学者であるジャック・ラカンである。彼は人間の発達段階の初期に「鏡像段階」というものを想定した。生まれだての幼児は「人間の外面」しか存在しないが、その目の前の世界に他者が存在して自分に対して様々なアクションを取る。それを鏡の様に真似をすることで、社会性を身に付けていくというのである。つまり「人間の外面」は生まれつきに備わり、「人間の内面」を後天的に学んで体得していくことと、そこに他者という存在が大きな役割を果たすことがわかる。

いずれにしても、「人間の内面」ではいきなり特定の他者という認識なので、どうしてもその他者の価値や行動に神経質になってしまう。それよりも「人間の外面」での主客一致における、「人間の反対」側の存在という認識から「無人称の他者」を念頭に置けば、また感じ方も変わってくるだろう。

12. 「対化」「等化」「中和」

ヌーソロジーでは、「人間の外面」をより詳細に分析する上で、「対化」「等化」「中和」という概念を用いる。これは空間認識の解像度を上げて行く為のステップに用いられるのだが、ある意味弁証法的な形態を持っている。尚、この概念は弁証法の様な概念的対立というよりは、空間的、幾何学的な対立を基本的に意味している。

「人間の外面」には元来対立的な二項が存在し、それを対化と呼ぶ。その対立概念をもうひとつ上の次元に上げるべく機能するのが等化である。そして生まれた新しい概念に対して定着させる形でバランスを取る機能を中和と言う。中和によりそれまでの対化と等化は見えない形となり、次は別の対化に対して等化が生まれていく。

そして、「人間の外面」における人間精神の最大の役割が「対化を等化すること」であり、それにより更に高い空間認識を得て、精神の向上を果たすという。つまり、二項対立に対し正誤を決めたり、中間を取るのとは、弁証法と同様に本質的ではない。正誤・善悪・男女等の二項対立を乗り越えた向こう側に行くことが本質となる。¹⁰

これは先に述べた「人間の内面」での、対立に対して何かでそれを埋め合わせたり、足りないものを手に入れたり、対立するものを押さえ込めば自由（思い通り）になれる、的なものとは、全く方向性が異なる。

13. 対化の究極としての「永遠の他者（人間の反対）」

先程「人間の外面」においては、「主客一致」の世界故に、他者というものが全く逆の位置に存在すると述べた。その他者は「人間の内面」での特定の〇〇さんという様な他者ではなく、西田の言う、それ以前に気がつく「他者という存在」という性質のものであることから「無人称の他者」と表現した。

ここでヌーソロジーからの視点ではあるが、様々に存在するであろう「人間の外面」での対化の中で、他者と自己の対化はその究極と考えられている。何故なら、「人間の外面」は空間認識で成り立っており、自己と他者はその点でどこまで行っても真反対だからである。

「人間の外面」では、目の前の空間は平たい画面の状態となる。つまり幅はわかるが、奥行きは把握出来ない。そこに「他者という存在」があるからこそ、その幅が奥行きとして認知出来、自分自身の幅が他者の奥行きとして機能する形となる。何から何まで反対側として機能することで「人間の外面」の解像度を上げてくれるのである。そこでタイトルの通り「人間の反対」とも呼べる存在が「人間の外面」における本質的な他者であり、追い掛けても真反対に存在する奥深い存在であることがわかるだろう。

表現上ここまで「無人称の他者」という言葉も用いたが、それは「人間の内面」での他者との対比表現であり、「人間の外面」での他者という存在の表現は、最終的に「人間の反対」の存在であると共に「永遠の他者」と呼ぶのが相応しいと思う。¹¹

人間にとって対化を等化することが精神の最大の役割だとすれば、それは誰でも無い「他者というもの」という最大の対化への等化の希求となる。その様な最大の存在に対して、コントロールしたい、認められたいという「執着」を持つことが、如何に本質から外れた状態なのかをお考えいただきたい。即ち「人間の内面」を意識することが良くないのではなく、「人間の外面」という空間を意識せずに「人間の内面」から脱出出来ない状態が良くないと考えている。

先に述べた「人間の内面」ばかりを尖らせてしまい、答え探しややり方偏重主義、AIやデータの誤った活用、等々の「現代病」が蔓延する中だからこそ、「人間の外面」という本質に眼を向けていただきたいと願っている。

14. 「人間の内面」は必要「人間の外面」を先手に

本論のまとめとして、拙論にお付き合いいただいて最も留意していただきたいことについて触れておきたい。よく本論の様なことを述べていると「人間の外面」が善で、「人間の内面」が悪、という解釈が出て来る。こうなると、その解釈自体が「人間の内面」における認識パターンであり、「人間の内面」に偏りすぎとなる。

強調しておきたいのは、「人間の内面」は「人間の外面」との両輪として、必要かつ重要なものであり、確実に存在する空間であるということである。単にそこに埋没してしまうと、見えない空間であることから、人間の感覚に誤謬を生じさせているに過ぎないのである。人間本来の必要不可欠な欲求というものが間違った方向に進んで、内面絶対化を招いてしまうのである。

その為の対策は、「人間の外面」をあくまでも先手にする意識を持つことだと考えている。西田が「人間の内面」に行く前に純粹経験があると述べた様に、ラカンの鏡像段階において生まれたての幼児に「人間の外面」しか存在せず、後天的に「人間の内面」を体得している様に、両者を人間として抱えながらも、「人間の外面」をあくまでも先手かつ上位の空間として認識すべきだと、本論の結論として強調させていただきたい。

これもまた別の機会に論及するが、この為には「人間の内面」を整えることが必要となる。「人間の内面」には必ず誰かの意図、悪く言えば思惑が入り込んでいる。あなたの周囲にあるモノ達には自然を除いて全て誰かの意図が入り込んでいる¹²。それらが複合した社会・世界を自らと切り離れた瞬間に、自分の正当なる判断（つまり自分軸）を見失って、他人依存、他人主導（他人軸）に苛まれてしまうのは当然のことだろう。そうなると、自分が得をしたい、自分が損をしたくない、等々の明らかな他人主導認識とちっぽけな私認識へと入り込んでしまうことになる。

従って、様々な修行や宗教や哲学で「人間の内面」を整える為の教えが存在するのだと筆者は感じている。「人間の内面」が整うことが自分軸でもある「人間の外面」へ出る重要なアプローチであると確信している。

「人間の外面」は、特質として他者が同じ時刻に同じ場所にいることは出来ない。ある意味どこまで行っても「自分だけの世界」なのである。そこからスタートをする精神が、多くのことを切り開いていくことだろう。

15. エピローグとして

以上、本論は「人間の外面」と「人間の内面」を分離して、「人間の内面」を整え「人間の外面」を先手に意識することを提唱した。そして「人間の外面」の特質を列挙すると共に、そこには「人間の反対」である「永遠の他者」という大きな存在が屹立していることを強調した。

本論の最後には、研究ノートという形態でもあるので、余談的というかエピローグの様なことを列挙して筆を置きたい。

まずは「人間の外面」には独特のインパクトがあるということである。これをあるところでベルクソンの「エラン・ヴィタル」と同じものと言われて、ビックリしたことがある。とは言え、少なくとも日本語に多いオノマトペや詫び寂び、木漏れ日の様な情緒的な表現は「人間の外面」のインパクトから生まれたものだと感じている。それらが最終的に「空気を読む」という表現に発露していると思う。

また、スピリチュアルや成功法則の多くに、「人間の外面」を意識することを目的にしている節があると感じている。古今東西様々に存在しているが、些か古いが一例のみ提示すれば、心理学者リチャード・ワイズマンが2004年にヒットさせた一般書『運のいい人、悪い人～運を鍛える四つの法則』の様に、様々な事例から良い流れに乗った人物達は損得よりも目の前の状況を改善させることで、運を味方にするというストーリーが多く見られる。

先述の通り、歌の世界観や歌詞には「人間の外面」を語ったものが多いが、それは映画や演劇、物語等々にも多く見られる。その方が受け取る側に訴求するものがあるのだろう。加えて物語は成功しない登場人物に極端な「人間の内面」への埋没キャラを設定しているものが多い。日本の昔話でも、「花咲かじいさん」「かちかち山」「舌切り雀」等々、枚挙に暇がない。

筆者は小さい頃、「白雪姫」を絵本で初めて読んだ時、美しいことが自分の支えである魔女が、鏡から白雪姫の方が可愛いと言われ、ショックを受ける流れで、いけないと可愛くなるのかと考えていたのだが、白雪姫を追い落とそうとする展開に大変驚いたことがある。何故なら、競争気分で魔女が台頭した白雪姫を追い落とすことは可能でも、自分の美への努力が蔑ろにされれば、いずれまた別の人間が出て来てしまうからである。これは魔女の愚かさを表現しているのであろうが、子供の頃の筆者に競争への幻想を植え付けてくれるきっかけとなった。